



2008年

SORA 24号

晴
夜

(24)
—
3

柴
田
佐
知
子

広
が
り
て
も
う
動
か
ざ
る
鰯
雲

神
楽
笛
夜
も
鋭
き
嶺
並
ぶ

火
の
上
に
大
魚
の
切
り
身
寒
波
来
る

鱗 付く長靴に冬来りけり

魚河岸の声は尖りて十二月

長靴にズボンの裾を入れて冬

魚糶りて肩もて歩く寒の入り

日に三度食べて働き冬ぬくし

柚子湯

樋口みのぶ

郭公や旅の朝餉は浴衣着て
山小屋をつつむ夕暮虫すだく
十月や日差しななめに杉木立
芋畑掘られて雨の夜となれり
西側の庭の隅より秋のこゑ
白木槿風のなき日は窓あけて
秋風や五百羅漢の泣く笑ふ
神の留守庭をうろつく大鳥
雪囲ひして慣らしてゐたる籠の鳥
山越えて宿の柚子湯に迎へらる

・雪野郎？・

雪女郎になぜ男性がいないのかと、或るコラムニストが書いていた。そういえば、そうだ。

キムタクやヨン様など、自分のひいきの男性のような雪の精が夜な夜な戸を開けて…というのも面白い。女性には、それで命を絶たれれば本望というもの。では何と呼ぶか。

雪男と呼べば厳めしすぎるし、雪野郎では品がなさすぎる。いずれも艶っぽさからは、ほど遠い。

やはり、男性は名前からして無理のようである。



冬隣

青山

悠

参道のぼろ市のぞく菊日和
 手繰り寄せ美男かづらの空遠し
 園丁の縄提げてゆく冬隣
 螻蛄鳴くやどかと据りし米袋
 なほ赤く夕日まみれの烏瓜
 肥後牛の赤のかたまる暮の秋
 冬菊の門押してくる伝道師
 会へばまた憎まれ口の冬うらら
 大寺の高き廻廊冬の鵲
 宿下駄の音つつしみて夜神楽へ

・いもがま・

幼い頃、食事をする団欒の畳の部屋に続いて広い板の間があった。その一隅に開閉の出来る部分があり、厚い板をめくると、四角の穴が掘られていて、敷きつめた糶殻の中に薩摩諸が貯蔵されていた。「いもがま（諸釜）」と呼んでいた。

いたずら盛りの弟達はときどきこの諸釜に入れられていた。

私も一度入れられた。厚い板蓋の隙間から僅かな光が差し込み、ちくちくする糶殻の肌ざわりと長い触角を振って飛びつく蠶馬が怖かった。こんなとき祖母が必ず「早よう断りば言いんしゃい」と上から声をかけるのである。母はそれを見越しており、子供が「またから、しまっせん」と謝ると諸釜から出してくれるのであった。

あるとき諸釜に入れられた弟の泣き声がないので覗くと、元気がなくなっていたとかで、その後は他の二人の弟も「諸釜の難」を免れていたようである。

消壺

秋 千 晴

落鮎の腹はち切れて焼き上がる
小さき子一番大きな栗もらふ
バス停の大樹に畳む秋日傘
千如寺のもみぢ一葉を土産とす
自転車に空気を入れて秋うらら
雨の日も月見団子の売られをり
箆笥より樟脳匂ふ小春かな
掃き終へし所めがけて木の葉舞ふ
薄暗き土間に冬瓜置き去りに
叱られて消壺の炭のごと黙す

・蝶・

娘が阿蘇で自然環境保護活動をしている。先日、子どもたちとキャベツ畑に行ったときのこと。農家のおばさんは「蝶々を見つけたらタマゴを産み付けにきとるから、捕まえて踏んづけといて!」と言われた。

娘が捕まえたのを見たおばさんは、「オッ！偉い!」と言ってくれたが、子どもがそばに来て「蝶々さんは卵を産みに来ているのよ」と言っ、キャベツ畑に戻してやったそうだ。娘は農家の方には申しわけなかったけれど、ホッとしたと言う。

命の大切さや、減農薬で野菜を作っておられる農家の方の苦労、また減農薬だからこそ蝶々もいっぱい来ていることを、段階を追って伝えていかなければならないことを、農家のおばさんと話したそうだ。いつかはこの子どもたちも、「蝶々を踏んづけること」も理解する時が来ることでしょう。

山の音

あさなが捷

ふるさとを問はれ花野の空思ふ
吊り橋の全紅葉を渡りけり
霧晴れて地の底よりの赤き屋根
今年限りと母よりの唐辛子
病棟の窓に猫来て竹の春
帰り花泣かれて嬰をもどしけり
楳円にて巡る銀河や波の花
もみがらにまみれて林檎匂ひけり
肩寄せて何かうれしき日向ぼこ
寒鯉の背鰭横切る山の音

・父の帽子・

母は戦前、写真の交換だけで当時台湾電力に勤めていた同じ歳の父の元に、単身嫁いで行ったのだそうだ。

戦後引き上げてからは姑・小姑に仕え、慣れない農作業や食糧難に耐えて私たち四姉妹を育てた。父はと云えば家では縦のものを横にもしない昔の男だった。母なしでは何も出来ない、その父の介護を八十九歳までしたので、一人になった後の母は本当に穏やかな日々を送っていた。

母が亡くなり、棺に何を入れようかという話になったとき私は真つ先に、父の棺に入れ忘れた毛糸の帽子をと、提案した。「そうしたら、お父さんに会わないといけないくなるよ」と言下にすぐ上の姉が言った。

考えてみれば、私も母に又あの苦勞はね…と思ったのだが、当日その帽子はちゃんと棺に収められていた。

果たして母は父の元へ行ったのだろうか？

冬木立

小林 朱 夏

塩田に立冬の風渡りけり

冬至南瓜厨は静かに片付いて

冬木立全てを見せて揺ぎなし

木枯しや風呂敷ひとつの相撲取

鯛焼を焼いて一世を白前掛け

お年玉名を読み上げて渡しけり

橙の横座りする鏡餅

佗助のひとつ咲かせてふたつ落つ

久女忌や闇に果実酒眠らせて

干し蒲団膨れ過ぎしと叩かるる



・いつの日か・

今年の初買物はデパートの初売り福袋の水着だった。大勢の客の波が引いた頃、店員の接客はすこぶる優しかった。サイズSとMの袋を押しつけXLに伸ばした手をやおら離して、私の前に置いた袋はLサイズ。そして微笑んだ。「プールに映えるきれいな色で、しかも裏に強力なネットが張つてあるのが二着入っています。」

日頃は慎重な私だが、屠蘇の酔いもあり、自分のサイズを過小評価してしまった。

結果、帰宅後の試着一回のみで、季節が変わる度に、衣装ケースの奥へ奥へと追い遣られた水着は、プールに映える日を夢見つつ、私のサイズダウンを祈念し、冬眠中である。

豊の秋

苑 実 耶

小あがりに一升びんや豊の秋
磯菊や御座船大きく傾ぎをり
みあれ祭海人は媛神護りくる
布草履すでに完売秋まつり
汀まで足跡雀蛤に
空高し生業農と決めてをり
螳螂に猫がとびつく日向かな
ほどよきは束の間のこと冬立てり
羊飼になりきつてゐる聖夜劇
山伏の里に鬼面や寒に入る



・彼岸会・

秋の彼岸の時、妹が言った。「彼岸って、一体何？お盆のように仏さんは帰って来るんだらうか？」

迷いのこの岸、さとの彼の岸はわかるが、だから何？少し調べてみた。

彼岸会とは、年中で最も良い季節に、自分の生活を省み、如来のご恩を謝し、本願の船にのせられて、さとの彼の岸にいたる身のしあわせをよるこぶ、春分秋分の日を中心に行われる法座のこと。

俳句の季語にも目から鱗が落ちる思いなのに、こんな身近なこともよく知らなかったとは…。世の中、知らないことばかりと改めて思う。しかし、妹に偉そうに教えてやったのは言うまでもない。